

第68回卒業式 校長のことば

神奈川県立多摩高等学校長 梅田 俊輔

季節は今、三寒四温の時を迎えています。折しも、校庭の桜はつぼみがふくらみ始め、その内側には確かな春の息吹が感じられます。寒さと暖かさを繰り返しながら季節が静かに前へ進むように、卒業生の皆さんもまた、日々の歩みを積み重ねて、本日、このよき日を迎えました。

多摩高等学校六十八期生の皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。そして今日の日を特別な思いで迎えられたご家族の皆さまに、心よりお祝いを申し上げます。

本日、卒業式を執り行うにあたり、多くのご来賓の方々のご出席を賜りました。高い席からではございますが、心よりお礼申し上げます。

さて、卒業生の皆さん、これまで私は全校集会などを通じ、様々なお話をしてきましたが、本日は私から皆さんに高校生活最後のメッセージをお伝えしたいと思います。

十六世紀の初め、イタリアのフィレンツェで、ある絵画の制作が始まりました。制作者の名前は、皆さんもご存じのレオナルド・ダ・ヴィンチ。彼はある人物から妻の肖像画を描いて欲しいと依頼されました。これが世界的な名画、「モナリザ」誕生のきっかけです。しかしこの絵は、依頼主の手に渡ることはとうとうありませんでした。諸説ありますが、ダ・ヴィンチはこの作品を生涯手元に置き続け、亡くなる直前まで筆を入れていたと考えられています。つまりダ・ヴィンチにとって、この作品は完成作として依頼主に渡されたものではなく、制作途中のままで終わったものということになります。なぜダ・ヴィンチは未完成のまま手を入れ続けたのでしょうか。その理由は、彼が常により良いものを求め続けたからだと言われています。実は彼は「モナリザ」だけではなく、多くの作品を未完成のままで終わらせています。それは、彼の「完成よりも探求し続ける姿勢こそが、創造の源である」という考えの表れであったのです。であるからこそ、「モナリザ」の普遍的な美と魅力は、いつまでも輝きを失わないのではないのでしょうか。

このエピソードから見えてくることは何か。それは、私達の人生もまた、完成形など存在しないということに他なりません。ダ・ヴィンチのように、生涯にわたって理想を求め続け、探求し続ける姿勢こそが、人生を豊かにするのだと思います。皆さんの人生もまた、いつか完成するというものではなく、常に新しい可能性に満ちあふれており、それを追求し続けることが、より良い人生に繋がっていくのです。

先日、2001年にノーベル化学賞を受賞した野依良治さんのお話を聞く機会がありました。その中で、印象に残ったのは次の言葉です。「人生は地図を持たない旅のようなもの。多くの偶然とわずかな必然の連続で成り立っている。将来どうなるかなんて誰にも分らない。大切なことは諦めずに好きなことを追求すること。そして何より経験を積むこと」。

学びにゴールはありません。学ぶとは、学んだことを生かしながら、多くの経験を積むことを言うのです。今皆さんの前には真っ白なキャンバスが広がっています。多摩高校で学んだことを最大限に生かし、キャンバスを自分色に染めていってください。人生にとって無駄な経験など一つもありません。この多摩高校での三年間の自分の足跡を、確実に未来に繋げていって欲しいと思います。

そして今皆さんの周りには、三年間苦楽をともにしてきたかけがえのない友人たちと、これからもお互い励まし合い、支え合う関係性を大切にして欲しいと思います。

保護者の皆さま、これまで陰になり日向になり、お子様を支え続けて来られたことに、心より敬意を表します。これからも、お子様のよき理解者として、成長を見守っていただけたらと思います。三年間、様々な面で学校を支えていただき、心より感謝申し上げます。

それでは皆さん、多摩高校で過ごした日々の思い出を胸に、精一杯羽ばたいてください。私たち教職員一同、皆さんと出会えたことに感謝して、私のはなむけの言葉といたします。

卒業おめでとう！ お元気で！

令和8年3月6日